研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著， 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概　　要
(著書(欧文))				
(著書(和文)) 1. 大都市サブセンターの変容と再生の可能性―21世紀と世田谷区三軒茶屋の新しい胎動	共著	2001年10月	こうち書房	本書は再開発ビル「キャロットタワー」の登場を契機に大きく変化する東京都世田谷区三軒茶屋を東京のサブ・センターとして位置づけ、同地区の地域社会変動を行政の動きとも対応させて捉えたものである。筆者はこのうち「地域組織およびリーダーの分析」（pp.52-63.）を担当し、町内会および商店街の概況を整理すると共にそのリーダー層に関する分析を行った。（編者：大黒聰、佐々木隆爾、世田谷区自治問題研究所、分担執筆：大黒聰、佐々木隆爾、和田清美、小笠原尚宏、ほか６名）
2. 21世紀の新しい自治体行政への挑戦―第二次世田谷区政白書	共著	2003年2月	こうち書房	本書は、東京都世田谷区の区政をはじめとした諸課題を発見し、新たな行政と市民との関係を建設的に論じたものであるが、筆者はこのうち「市民活動、とくに『NPO法人』とパートナーシップ」（pp.283-287）において区内のNPO法人の概況を把握するとともに、「市民活動支援事業の展開」（pp.287-292）において全国の自治体の中でもいち早く行政と民間との協働を打ち出した区の同事業の展開を整理し、加えてその課題を明らかにした。（編者：世田谷区自治問題研究所、世田谷区職員労働組合、分担執筆：藤井史朗、山本篤民、佐々木隆爾、村松加代子、小橋昇、市川尚子、大黒聰、橋本美代子、中村重美、北川隆吉、原田博夫、川崎一泰、和田清美、織田和家、小笠原尚宏、ほか５名）
3. 社会運動研究入門	共著	2004年12月	文化書房博文社	初学者が社会運動研究に入る端緒となる教科書として刊行された『社会運動研究入門』に所収された「文献リスト」（pp.294-276.）を三上真理子、柳沢志津子とで執筆。総論と各論とに分け初学者が参考文献として利用できる基礎的文献を網羅した。うち筆者は「住民・市民運動」（市民参加、ボランティア、NPO・NGOなど）、「生活・環境」（環境・開発、消費者・生活協同組合など）を担当した。（編者：帯刀治、北川隆吉、執筆者：牛山久仁彦、高田昭彦、浅見和彦、坂幸夫、星野潔、稲葉奈々子、小笠原尚宏、ほか２名）

4. 現代社会論への社会学的接近（シリーズ現代の産業・労働１）	共著	2005年9月	学文社	産業・労働研究のシリーズとして刊行された本書の文献解題の一部（トーマス・モア『ユートピア』、サン・シモン『産業者の教理問答』）を担当した。（編者：浅野慎一、執筆者：北川隆吉、吉田浩、大畑裕嗣、木下武男、小笠原尚宏、ほか４名）
5. 大学生のための社会学入門	共著	2016年7月 （2021年４月、５刷）	晃陽書房	本書は、日本学術会議の参照基準に対応した初学者向けの社会学教科書（篠原・栗田編）であるが、このうち２章（「第12章　生活空間としての地域社会」（pp. 135-146）、「第14章　宗教から社会を捉える」（PP. 163-174））およびコラム６編を担当した。（編者：篠原清夫、栗田真樹、執筆者：池田曜子、宇田川拓雄、大矢根淳、小笠原尚宏、ほか５名）、なお、各回増刷において、統計の最新版への修正を行っており。
６．檜原村湯久保の暮らし	共著	2017年6月	「市民活動の広場」発行委員会	同書は『市民活動のひろば』紙に連載された「檜原村湯久保の暮らし」をもとに刊行されたものであり、うち「大学生による『風入れ隊』」を執筆した。これは、前掲の「社会活動項目」の「『風入れ隊』の活動」についてまとめたものである。
（学術論文(欧文)） 1.				
（学術論文(和文)） 1. 祭りと地域社会	単著	2002年3月	常磐大学大学院（修士論文）	本稿は常磐大学大学院人間科学研究科に提出した修士論文であり、神社祭礼３事例を基に、当該神社祭礼における祭祀組織および祭礼執行のあり方を、検討したものである。
2. 沖縄の地域社会構造と福祉活動	共著	2003年3月	コミュニティ振興研究 ３号 pp. 1-43.	本稿は、沖縄県那覇市を対象に、とりわけ地域住民組織である自治会のあり方を手がかりとして地域社会構造の解明を試みたものである。そのうち筆者は伊佐山忠志と共に「那覇市における地域集団の現況―自治会アンケート調査による中間的知見」（pp. 15-30.）を担当し、同市の全自治会を対象とした郵送調査の結果を主に、その特徴について記述した。（分担執筆：山本英治、伊佐山忠志、水嶋陽子、小笠原尚宏）
3. ＮＰＯとパートナーシップ事業―東京都世田谷区の調査から	共著	2003年4月	日本都市学会年報 36号 pp. 162-167.	本稿は行政と民間との協働事業をいち早く展開した世田谷区を対象として、同区とＮＰＯが取り結ぶパートナーシップ事業の概要を整理し、あわせてその課題を探ったものである。（和田清美・小笠原尚宏）

4. 大都市におけるＮＰＯ法人の現況と課題―東京都世田谷区のアンケート調査から	単著	2004年4月	日本都市学会年報 37号 pp. 65-70.	本稿は世田谷区内に主たる事務所を構えるすべての特定非営利活動法人を対象とした郵送調査を実施し、同法人の現況を把握し、あわせてその運営上の課題を明らかにしたものである。同区内におけるＮＰＯ法人は運営規模からみると大規模な「事業型ＮＰＯ」と小規模なボランティア団体を法人化したいわば「草の根型ＮＰＯ」とに二分され、それは法人の設立目的の方向性、すなわち事業化／互助の志向となって現れており、それらＮＰＯのタイプに応じた課題が析出された。
5. 山車祭りにおける神輿渡御の変容―佐原市本宿の祇園祭を事例として	単著	2005年3月	国立歴史民俗博物館研究年報 124号 pp. 163-181.	本稿は山車祭りにおける神輿の位置づけの変化を渡御形態の変化から明らかにしたものである。佐原では近代以降、渡御運営は①氏子各町からの出仕による氏子惣町の運営、②惣町による担ぎ手の雇用、そして現在の③氏子各町の年番による運営へと変化するが、とりわけ③が渡御のあり方を変え、各町内が財力がそのまま渡御の運営を規定するようになり、同時に渡御が祭礼行事の中で漸次縮小していく契機となったことが析出された。
6. 長老衆と祭祀組織―滋賀県野洲市須原の苗田神社の事例報告	単著	2005年3月	現代の宮座の総合的調査研究および宮座情報データベースの構築 pp. 81-90. 国立歴史民俗博物館	本稿は滋賀県湖南・須原の祭祀組織について報告したものである。同地区の氏神・苗田神社の祭祀組織は氏子男性の年齢順に上五人、上十人、上二十人と年齢を基準とした長老組織が重層的に組織されており、それら組織の加入に際しては厳粛な座入り儀礼が執行される。本稿では、それらの組織と各種儀礼について観察調査をもとに報告し、近江・湖南地方における村座の構造について論じた。
7. オビシャ祭祀の構造と変容―儀礼と祭祀組織をめぐって	単著	2007年3月	利根川下流域村落の伝統と現在―茨城県稲敷市上須田・下須田地区の調査報告 pp. 49-76. 常磐大学人間科学部現代社会学科	本稿は、利根川下流域の水稲単作村落である稲敷市上須田におけるオビシャ祭祀について、観察調査を通じて儀礼の構造を把握するとともに村落における祭祀の位相を明らかにした。同祭祀は対象地においてもその組織原理に若干の異同がみられるが、村落を単位に組織されるのではなく、村落内を分割する形で組織され、また、その独自性が著しく強い。その組織原理は利根川下流域の講組結合的な村落構造をとらえる上で欠くことのできないものであることを示した。
8. 村組と祭祀組織―茨城県稲敷市上須田のムラ・クミ・オビシャをめぐって	単著	2009年7月	現代社会の構想と分析 ７号 pp. 82-111.	本稿は利根川下流域に位置する一農村を事例として、村落におけるイエおよび住民相互の結合の携帯を村落内の近隣組織の機能に注目して検討したものである。対象地においては近隣組織が重層的に組織されているが、そのうち近世期から近現代に至るまで同一の組織原理によって維持されてきたものとしてクミがある。クミはその内部に祭祀対象を有し、儀礼としてのオビシャを営むが、このクミが緩やかに連合することによって村落が構成されていることが析出された。

9. 村落における小集落の位相―福島県大沼郡金山町山入の「ツボ」をめぐって	単著	2013年3月	常磐研究紀要 ７号 pp. 15-32.	本稿は、福島県奥会津の山村を事例として、近隣組織のあり方とその機能を検討し、併せてその現代の村落生活における意義を検討するものである。具体的には、10戸全戸で構成される「ツボ」と呼称される近隣組織と近世村の後継である区との関係をみることを通して、村落生活における基礎的な地域・近隣組織がこのツボであることを明らかにした上で、ツボが果たしている機能を整理するとともにいわゆる限界集落に位置づけられる対象地における共同性の困難とそれへの対応について論じた。
10. 近郊山村・檜原村の社会と住民生活に関する調査研究 ―常磐大学人間科学部現代社会学科の社会調査実習―	単著	2015年3月	社会と調査 14号 pp. 83-89.	本稿は、『社会と調査』に「調査実習の事例報告」として掲載されたものであり、2012年度に東京都西多摩郡檜原村で実施した常磐大学人間科学部の「フィールドワーク（社会調査実習）」の実習運営と調査で得た知見を整理したものである。
11. 生活空間としての地域社会（再掲）	単著	2017年7月	大学生のための社会学入門 pp. 135-146 晃陽書房	「社会集団としての地域社会―都市と農村」「近代化の産物としての都市」「日本農村の特質と変貌」「ローカルコミュニティの現在」「脱地域化と再地域化」の５節で構成され、社会集団類型論における地域社会の位置づけ、都市―農村論、シカゴ学派をはじめとする都市研究、有賀喜左衛門・鈴木榮太郎以降の農村研究の系譜の学説史を整理したほか町内会論をはじめとした現代の地域社会が抱える課題の論点を提示した。
12. 宗教から社会を捉える（再掲）	単著	2017年7月	大学生のための社会学入門 pp. 163-174 晃陽書房	「宗教研究と社会学」「宗教の基本的性質―聖と俗」「近代化と宗教変動」「日本人と宗教」の４節で構成され、デュルケム、ウェーバーの宗教学的言説を整理した上で、宗教社会学の基本概念である聖と俗を核として、近代以降の伝統宗教の衰退と新宗教の勃興、世俗化に至る現代社会における宗教の位相を解説した。
（報告書・会報等）				
1. 国道246号線整備と住民対応	単著	2001年3月	三軒茶屋駅周辺地区商業集積の分析総 p. 90. pp. 42-44. 日本大学文理学部佐々木研究室（代表佐々木隆爾）	１および２は、世田谷区産業振興部の委託調査の報告書である。１では通信回線の高速化を含めた共同溝の整備等、国道246号線の情報ハイウエイー化事業とそれに対応した住民の対応を報告し、２では太子堂および三軒茶屋地区の町内会・自治会および商店街とそれら組織のリーダー層に関する面接調査の結果を分析した。
2. 住民組織およびリーダーの分析	単著	2001年3月	三軒茶屋駅周辺地区商業集積の分析総 p. 90. pp. 51-58. 日本大学文理学部佐々木研究室（代表佐々木隆爾）	

3. 市民活動支援事業の動向と課題―パートナーシップ事業を中心に	単著	2002年3月	「第二次世田谷区政白書」中間報告書 総p.120. pp.90-95. 世田谷自治問題研究所	本報告書は世田谷自治問題研究所が行った区政調査の中間報告書であり、筆者はそのうち区と民間との協働事業として全国に先駆けて行ったパートナーシップ事業を担当し、行政の担当課およびパートナーシップ事業を担当したＮＰＯ・ボランティア団体に対してヒアリング調査を実施し、区政における同事業およびＮＰＯ・ボランティア団体の位置づけを探った。
4. 地域住民組織および行政と関連をめぐる問題	単著	2003年3月	21世紀の名古屋における医療・福祉政策の基本的検討試論―2003年度「地域医療・地域福祉の在り方」調査の為 の予備的・仮説的考察 総p.55. pp.27-34. 現代社会構想・分析研究所（代表　北川隆吉）	本報告書は名古屋市の委託調査の報告書であり、筆者はそのうちコミュニティ施策を担当した。同市の町内会、子ども会、老人クラブ、民生委員など地域の諸集団は学区に連合会を組織し、これら各連合会が連なり学区協議会を組織する。コミュニティ施策はこの学区協議会を単位に展開されるが、これら学区を対象としたコミュニティ施策と市の各部署で展開されている地域団体支援策との整合性およびその外部の行政評価での評価内容をふまえ、名古屋市におけるコミュニティ施策の方向性について検討した。
5. 自分たちの足元をみつめ、地域にねざした活動を―世田谷から一人のホームレスも出してはならない	単著	2003年3月	「世田谷区の建設業および組合の現状と地域社会での活動をめぐる総合調査」中間報告書 pp.42-53 東京土建東京土建一般労働組合世田谷支部・世田谷自治問題研究所	５および６は東京土建一般労働組合世田谷支部と世田谷自治問題研究所の共同研究の報告書である。東京土建は建設・土木従事者の労働組合であるとともに地場の建設・土木業者の同業組合的な側面をも多分に有する組織であるが、筆者は５では世田谷支部における社会貢献活動を整理し、貢献活動の実施が、建設・土木業従事者の仕事確保につながっていくことを事例を通して示した。２では、これら社会貢献活動のうち、非常時の際の町内レスキュー隊の活動に焦点をあて、世田谷支部と地域社会との連携について、その可能性を論じた。
6. 町内レスキュー隊―ご近所の底力	単著	2003年3月	新しい世紀の組合の新たな前進を目指して 総 p.136. pp.83-87. 東京土建一般労働組合世田谷支部・世田谷自治問題研究所	
9. 活動報告「若い力を地域に」	単著	2016年3月	『市民活動のひろば』138、市民活動のひろば発行委員会（立川市）18-19	同誌からの依頼によって、本学「風入れ隊」発足に至る過程を、本学の社会調査実習（フィールドワーク）との関係において紹介すると共に、現在の活動内容、将来像について説明した。
10. 社会調査実習紹介「山村で『社会』と出会う―東京都西多摩郡檜原村の調査実習から	単著	2016年4月	社会調査協会HP http://www.jasr.or.jp/students/practice_report.html	社会調査協会広報委員会の依頼によって、報告者が担当した東京都西多摩郡檜原村での社会調査実習を調査課題、実習運営、知見の各観点から紹介した。

11. コラム「村普請の現在」（再掲）	単著	2017年7月	大学生のための社会学入門 pp. 146-147 晃陽書房	村落の共同性を担保してきた村普請の現在の運営と課題を、東京都西多摩郡檜原村の水道普請、福島県大沼郡金山町横田の大堰普請の水に関わる共同を事例として説明した。
12. コラム「『七人の侍』と三軒茶屋―都市の中の村」（再掲）	単著	2017年7月	大学生のための社会学入門 pp. 147-148 晃陽書房	村落の共同性を担保してきた村普請の現在の運営と課題を、東京都西多摩郡檜原村の水道普請、福島県大沼郡金山町横田の大堰普請の水に関わる共同を事例として説明した。
13. コラム「磯野家とコミュニティ存続論」（再掲）	単著	2017年7月	大学生のための社会学入門 pp. 148-149 晃陽書房	テレビ番組「サザエさん」に描かれている近隣関係を手がかりにウエルマンの整理によるコミュニティ存続を解説すると共に、選択性によるソーシャルキャピタルがローカルコミュニティに果たしている機能を論じた。
14. コラム「鰯の頭も信心から？」（再掲）	単著	2017年7月	大学生のための社会学入門 p. 174 晃陽書房	映画「猿の惑星続編」および日本住血吸虫のノンフィクションを題材に、宗教が生まれる背景にある「信仰」がいかに生まれるのかを、「畏敬」の念であるオソレとタタリから考察した。
15. コラム「葬送墓制の現在」（再掲）	単著	2017年7月	大学生のための社会学入門 p. 176 晃陽書房	現代日本における葬送墓制の現状を、他界観、死生観、イエを中心とした家族のあり方、宗教離れの各点から論じた。
16. 風入れ隊	単著	2020年7月	一般社団法人　湯久保宿	一般社団法人湯久保宿の活動としてこれまでに行ってきた本学の「風入れ隊」の活動概要を紹介した。
17. 令和３年度拡大版市民懇談会記録書	共同	2022年6月	水戸市	左記懇談会の記録集。町内会・自治会をめぐる全国的動向について解説し、併せて水戸市の町内会・自治会の活性化について提案を行った。
(映像等)				
1. 新宿諏訪神社秋祭―北総佐原の二つの都市祭礼１	共	2003年3月	国立歴史民俗博物館 180分	１～３はいずれも制作：上野和男・宇野功一、撮影協力：蘇理剛志・小笠原尚宏。平成12年度～14年度科学研究費補助金基盤研究（A）（1）「伝統的地方都市の地域的特性とその変容に関する比較研究」によって作成された民俗映像。
2. 本宿八坂神社夏祭―北総佐原の二つの都市祭礼２	共	2003年3月	国立歴史民俗博物館 270分	
3. 佐原の町の二つの祭―八坂神社夏祭と諏訪神社秋祭	共	2003年3月	国立歴史民俗博物館 82分	
4. 謎と幻想を撮る	共	2007年12月	「謎の大祭礼」撮影製作委員会 140分	構成・照明：渡辺生、編集：高宮大、脚本：小笠原尚宏。茨城県常陸太田市の金砂大祭礼の民俗映像であり、祭礼当日に止まらず、２年前からの準備および祭礼後の新たな取り組みまで映像記録として残したものである。申請者はこのうち脚本を担当した。

（国際学会発表） 1.				
（国内学会発表） 1. ＮＰＯとパートナーシップ事業―東京都世田谷区の調査から	共	2002年10月	日本都市学会第49回大会	本報告は行政と民間との協働事業をいち早く展開した世田谷区を対象として、同区とＮＰＯが取り結ぶパートナーシップ事業の概要を整理し、あわせてその課題を探ったものである。（報告者　和田清美・小笠原尚宏）
2. 神社祭礼における年齢階梯制と子どもの役割―北海道江差町の姥神大神宮渡御祭を事例として	単	2003年10月	日本民俗学会第55回年会	本報告は、北海道江差町の山車祭である姥神大神宮渡御祭を事例として、町内が出す山車に対する子どもの関与について扱ったものである。山車の内部組織において、最終的に頭取と呼ばれる山車の運営責任者に至るまでには多様な階梯が存在するが、とりわけその初期の階梯は、年齢に応じてその役割が規定されている。この子ども期の山車への参加は数種の類型に分類でき、それが将来的な山車運営のあり方につながっていくことが示唆された。
3. 神社祭礼の変容と地域社会―茨城県茨城町小鶴の「当番制」と「神輿会」	単	2003年10月	日本村落研究学会第51回大会	本報告は茨城県茨城町小鶴の祇園祭を事例として、同祭祀の組織原理を明らかにしたものである。新住民の流入による混住化など近郊農村の社会変動を経験しながらも旧住民によって維持されている同祭祀は村落内を５分する坪とよばれる組織ごとに当番、下当、上当が軒並順に選出されそれら当番らが祭祀運営にあたり、さらにこの当番が、坪の周り順に大当番となり、祭祀全体を執行する二重の当屋制の原理がみられる。一方の神輿渡御は、氏子以外からも加入が可能な神輿会が組織され、伝統的な祭祀組織と開かれた祭祀組織とが同一祭祀ないで共存している今日の神社祭祀のあり方を析出した。
4. 大都市におけるＮＰＯ法人の現況と課題―東京都世田谷区のアンケート調査の結果から	単	2003年10月	日本都市学会第50回大会	本報告は世田谷区内に主たる事務所を構えるすべての特定非営利活動法人を対象とした郵送調査を実施し、同法人の現況を把握し、あわせてその運営上の課題を明らかにしたものである。同区内におけるＮＰＯ法人は運営規模からみると大規模な「事業型ＮＰＯ」と小規模なボランティア団体を法人化したいわば「草の根型ＮＰＯ」とに二分され、それは法人の設立目的の方向性、すなわち事業化／互助の志向となって現れており、それらＮＰＯのタイプに応じた課題が析出された。

5. 式年祭運営と祭礼執行の外部化に関する一考察―２つの金砂神社磯出大祭礼と神輿の担ぎ手をめぐって	単	2004年6月	「宗教と社会」学会第12回学術大会	本報告は、72年に一度執行される茨城県金砂郷町の西金砂神社・同水府村の東金砂神社の磯出大祭礼を事例として、両祭祀の神輿渡御のあり方を、とくに担ぎ手の組織原理に着目して分析したものである。長期の間隔をおいて執行される式年祭には、通常の祭祀とはことなり、経験の蓄積が見込めないことからその運営は記録をもとに再構築していくことが余儀なくされ、それは伝統と創造の狭間での揺らぎを生み出す。西金砂では担ぎ手を地元氏子に限り、その担ぎ方も口頭で伝承されてきた手法をとったのに対し、東金砂では氏子外から担ぎ手を募り、担ぎ方も担ぎ手の任意に任せた。この選択の違いは、西金砂には中間的な式年祭「小祭礼」が残存しており、大祭礼は小祭礼につながる再帰的な行事として認識されているのに対し、東金砂では一過性的なものとして捉えられていることに起因することを明らかにした。
6. 地域セッション　金砂大祭礼と「むらの底力」―72年に一度の祭りはいかに成立したか	単	2004年11月	日本村落研究学会第52回大会	本セッションは、72年に一度執行される茨城県金砂郷町の西金砂神社・同水府村の東金砂神社の磯出大祭礼を事例として、①両祭祀の祭祀執行のあり方の違いを、とくに組織原理に着目して分析し、あわせて②氏子地区外の渡御先の地域に組織された協賛会の組織原理について概略的に示したものである。セッションには西・東金砂神社の祭礼実行委員長、２カ所の協賛会長がそれぞれの立場から祭祀運営のあり方を報告したが、筆者は各報告に先立ち祭祀の全体の構造を報告し、各報告の後、全体の議論のとりまとめを行った。（報告者：小笠原尚宏・秋山清市・間宮英年・関定正・瀬谷俊一）
7. 現代における長老制の構造と変容―滋賀県野洲市・兵主大社所管社を事例として	単	2006年6月	日本文化人類学会第40回研究大会	本報告は滋賀県野洲市の兵主神社の所管社19社を対象として、各社の祭祀組織を、とくに長老組織のあり方に注目して分析したものである。長老組織は、ほぼすべての神社に認められるが、その組織原理はいくつかに類型化でき、またその組織も近世期に確立しているものから、近代のいわゆる国家神道化によって整備されたものとに二分化されることが示された。また、終戦期、生活構造改善期、近年の高齢化期に応じて変容がみられることが確認された。

8. ツボとマキ―奥会津村落構造における知見と血縁	単	2014年12月	島嶼コミュニティ学会第４回研究発表会	本報告は、福島県大沼郡金山町横田・山入の２集落を事例として、奥会津の村落構造を分析したものである。両集落はともに近世村が近代以降大字として成立しているが、小地域集団の機能および同族集団・マキの形成に偏差がみられる。この偏差をもとに、両集落の村落構造の差異と村落秩序の形成過程を検討した。
（演奏会･展覧会等）				
1. ヤングポートフォリオ1997	共	1998年3月	清里フォトアートミュージアム	「The Shouthern Part of OSAKA」1994-96年,B/W8×10, ４点（清里フォトアートミュージアム収蔵作品）
（招待講演･基調講演）				
1. 久井稲生神社御当行事	単	2005年10月	広島県三原市郷土史会連合郷土史講座	広島県三原市内に活動拠点を置く郷土史会の連合組織である郷土史会連合が毎年実施している郷土史講座（所管：三原市教育委員会生涯学習課）において、当地の久井稲生神社御当行事について、調査結果に基づく報告（祭祀組織の構造と儀礼の特徴）およびその民俗学的意義についての講演を行った。あわせて文化庁・国立歴史民俗博物館製作の映画『久井稲生神社の御当行事』を放映し、その解説を担当した。
2. 兵主郷のむらと祭り	単	2008年3月	滋賀県野洲市教育委員会第4回市史・郷土史学習会	滋賀県野洲市教育委員会の市史・郷土史学習会において、「兵主郷のむらと祭り」と題して講演を行い、兵主神社を中心とした祭祀圏で営まれている祭りの数々を、とりわけ祭祀組織（長老衆）に着目して紹介すると共に、文献史学に対する民俗学的研究の特徴、および当地の年中行事の民俗学的意義について講演した。
3. 久井稲生神社の御当行事の民俗的意義と継承の課題	単	2014年10月19日	三原市教育委員会・三原市文化財協会第14回文化財を生かしたまちづくりワークショップ・市民学芸員養成実践講座講演会	三原市教育委員会・三原市文化財協会第14回文化財を生かしたまちづくりワークショップ・市民学芸員養成実践講座講演会において、「久井稲生神社の御当行事の民俗的意義と継承の課題」の演題で、一般市民を対象とした講演を行った。
４． 町内会・自治会の基本的性格とその課題	単	2019年9月28日	吉田地区自治実践会講演	本学地域連携センターを介した依頼により、連合町内会・自治会である吉田地区実践自治会所属の各町内会・自治会役員に対する講演を行い、町内会・自治会の歴史並びに現状と課題およびその対応策について講演を行った。

(受賞(学術賞等)) 1.						
研　究　活　動　項　目						
助成を受けた研究等の名称	代表,分担等の別	種　類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概　　要
(科学研究費採択) 1. 村落社会における小地域の社会的機能に関する研究	代表	若手研究(B)	2014-16	日本学術振興会	3,770千円 （直接経費2,900千円）	本研究は、本研究は、いわゆる「村組」として捉えられてきた小地域の現代村落社会における意義を把握し、村落社会研究における新たな視座を提供することを目的としたものである（研究課題番号：26780282）。
2．祭礼行事の外部化ならびにアソシエーション化に関する研究	代表	基盤研究(c)	2018-21	日本学術振興会	4,290,000（うち直接経費3,300,000）	（研究課題／領域番号：18K01196）本研究は、祭礼行事における外部化（担い手層の地域社会外部からの参入）およびその運営組織におけるアソシエーション化を把握することを通して、祭礼研究ならびに村落・地域社会研究に新たな視点を提示すること、および祭礼行事の保存に向けた新たな資源の可能性の析出を目的とするものである。
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1.						
(共同研究･受託研究受入れ) 1.						
(奨学･指定寄付金受入れ) 1. 現代日本の農山漁村の構造に関する地域社会学的調査	代表	社会調査協会社会調査実習科目助成	2010	社会調査協会	290千円	本助成は、社会調査協会による社会調査実習科目に対する運営資金の助成であり、「現代日本の農山漁村の構造に関する地域社会学的調査」を調査課題として設定し、福島県大沼郡金山町を調査対象地として選定、調査活動を行った。

(学内課題研究(共同研究))						
1. 現在日本の「いえ」の構造と変容に関する実証的研究	分担 (代表：水嶋陽子)	—	2015-17	—	2,770千円	本研究は、高齢者の生活支援や伝統行事の継承、防災、葬送など地域住民による活動や、商家をはじめとした中小企業の同族経営体の動向に注目することで、集団としての「いえ」が、変容を迫られつつもその構造をいかに維持しているのかを把握することにある。分担者としては農村社会学および日本民俗学の立場からイエ研究を整理するとともに現代社会におけるイエの機能を実証的に確認することを目的としたものである。
2． 水戸弘道館聖域の空間構造に関する学際的研究	分担 (代表：松﨑哲之		2020-22		948千円	本研究は、水戸市の弘道館を中心として水戸市域および茨城・関東の「聖地」が陰陽五行思想に基づき配置されているとする研究代表者の仮説を学際的に検討することを目的としている。研究分担者としては、日本民俗学の視点から、弘道館および各「聖地」の民俗行事を把握し、それらの関連について調査研究することを企図している。
(知的財産(特許・実用新案等))						
1.	—			—	—	